

日本の読者はカミュ作品を、自分たちの経験に引きつけて読んだ。『異邦人』の翻訳が雑誌『新潮』1951年6月号に掲載されると、若い批評家中村光夫と小説家広津和郎の間で、「人生とは何か」「いかに生きるか」という問いを軸に、論争が起きた。

『ペスト』の最初の日本語訳は1950年、宮崎嶺雄の手による。その年に勃発した朝鮮戦争によって、いまだ連合軍の占領下にあった日本は、ゆるやかに国防政策に向けて、つまりは再軍備に向けて身構えつつあった。訳者は、「このペストを戦争という言葉に置き換えてみると、われわれの戦時中の体験がそこにまざまざと写し出されている」と解説した。小林秀雄も同年、『毎日新聞』と『新潮』に発表した『ペスト』評で同様に述べている。

小林は小説冒頭に引かれたダニエル・デフォーの一節に注目するが、孤島のロビンソンが「人間生活の限界状況」を表現しているように、オラン市のペストは象徴であり、疫病は、「最小限度の衣裳をつけた人間の存在の状態」を表現している。だから、小林はためらわず、悪に包囲された別の人間たち、すなわちアメリカ海軍に対する自殺的な特攻で死んだ元大学生たちの遺書に言及する。小林の書評と『異邦人』論争は、カミュが1950年10月に出版された『反抗的人間』の序論に次の一節を書いたのと、ほぼ同時代である。「今日、あらゆる行動が、直接であれ間接であれ、殺人に繋がるのであるからには、わたしたちは死を与えてよいかどうか、どのようにそうするかを知る前に行動できない。したがって重要なのは、物事の根源に遡ることではまだなく、世界がそのようである以上、そこでどう振舞えばよいかを知ることだ。」この一節には、広津＝小林論争の中で問われた「人生とは何か」と「いかに生きるか」が響いている。そして、兵隊になった元学生たちは、おそらく自分たちにはどうしようもない世界であって、いかに行動すべきかと問うていた。

小林は、戦争中の彼の言動によって、戦没学生を語る立場にあった。彼は1942年に雑誌『文学界』に掲載された「近代の超克」座談会に出席したが、哲学者、作家、歴史家、科学者、作曲家らを集めたこの座談会は、軍事体制への知的協力と見なされている。座談会で小林は、「ドストエフスキイといふ人は近代のロシアの社会とか、十九世紀のロシアの時代といふものを表現した人ぢやないのです。寧ろそういふものと戦って勝った人なのです」と述べ、この近代批判者としてのロシア作家を通じて当時の日本人が直面していた歴史を語っていた。「何時も同じものがあつて、何時も人間は同じものに戦つてゐる——そういふ同じもの——というものを貫いた人がつまり永遠なのです」。

小林は戦時中も戦後も、物質文明に軽蔑を抱く反近代主義者だった。批評家によれば、「人間はいつもペストにかかっている。」前述の『反抗的人間』でカミュが言い切っていたように、現代人は他人を殺すよう強要されている。戦後の小林の仮想敵は唯物主義的歴史観だった。「或る人々は言う、君達は正しい歴史の動きを見る目がなかった、目を誰かにふさがれていたのだから、君達を責めようとはしまい、と。」批評家は、ある学生が書きつけた言

葉、「最後の問い、歴史とは何か」をもって反論する。小林もまた、『反抗的人間』のカミュと同様、「神を歴史で置き換えてニヒリズムを回避したつもりの 20 世紀の革命」を弾劾したのである。

とはいえ、小林が守りたい価値は社会生活によって損なわれるので、現実から顔を背けて文学に向かう。反対にカミュは、1956 年の「市民休戦」のための請願に見られるよう、公共空間に参加するだろう。